

カリフォルニア大学アーバイン校 カリフォルニア大学ロサンゼルス校 図書館訪問記

仲山 加奈子*
矢野 恵子†

1 はじめに

2012年6月21日～28日の日程で、カリフォルニア州アナハイムにて開催されたALA（米国図書館協会）年次大会で発表を行うために渡米した。その際、カリフォルニア大学アーバイン校とロサンゼルス校の2校の図書館を訪問した。本稿は、このカリフォルニア大学図書館訪問の報告である。

2 カリフォルニア大学アーバイン校訪問

カリフォルニア大学（University of California）は州内に全10のキャンパスをもつ州立大学で、アーバイン校（University of California, Irvine：以下UCI）は1965年の開校と比較的新しい大学ではあるが、1995年に化学

*なかやま・かなこ／明治大学 学術・社会連携部 図書館総務事務室

†やの・けいこ／明治大学 学術・社会連携部 和泉図書館事務室

と物理学の教授がノーベル賞をダブル受賞する等の実績が知られている。学生数は 27,189 名(学部生 22,004 名、大学院生 5185 名。2011 年秋現在)で、13 の学部（ビジネス、生物科学、法学、工学、芸術、人文学、保健科学、医学、理学、社会生態学、社会科学、教育学、情報工学）と大学院から成っており、図書館は 6 館ある。

UCI 図書館の蔵書数は図書 3,400,000 タイトル以上、学術雑誌（紙＋電子）約 74,000 タイトル、マイクロ約 2,900,000 点、その他マルチメディア資料等 127,000 点以上で（2012 年現在）、カリフォルニア大学その他キャンパス図書館との資料の連



写真1 Langson Library 外観

携も行っている。カリフォルニア大学全体の保存書庫 2 箇所（Southern Regional Library Facility : SRLF と Northern Regional Library Facility : NRLF）を含めた大学図書館の全蔵書は、Melvyl database で検索が可能となっている。

UCI 図書館のうち、ローライブラリー（Law Library）、メディアセンター（School of the Arts Media Center）を除く主な 4 館の面積は 375,000m²で、閲覧席数は 3700、フルタイムの図書館員総数は 166 名（ライブラリアン 50 名、スタッフ 86 名、学生雇用 30 名）、年間総支出額は 18,250,000 ドル規模である。

今回の訪問では、Langson Library の Cathy Palmer 氏（Head of Education of Outreach）にインタビューを行い、また、館内を案内していただいた。

Langson Library は人文科学、教育、社会科学、ビジネスなどの分野の資料を持つ図書館である。地上から建物の最上部まで特徴的な装飾が一続きで外観（写真 1）からは何階建てか分からないが、実際は 5 階建て、入り口に当たる 2 階に主なサービス機能（レファレンスカウンター、貸出カウンター、リテラシー教室、学生交流室、カレント雑誌、研究者用閲覧室）が集まっている。地下にあたる 1 階にはマルチ資料・障害者支援エリア、3 階は東南

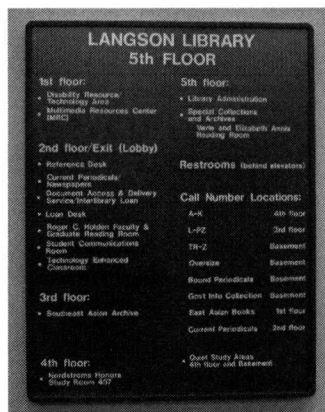


写真2 Langson Libraryフロアガイド

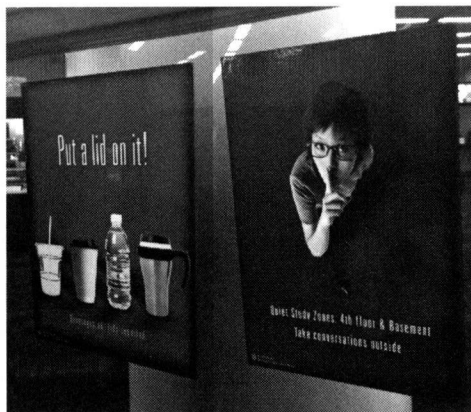


写真3 入館ゲートポスター

アジア資料、4階は学習スペース、5階は事務室・特殊コレクション室といったフロア分けになっており（写真2）、この現在の配置も利用者の要望を反映し変更しながら運用してきたとのことであった。

ゲート付近には、館内では持ち込み飲料に蓋が必要なこと、そして静寂エリアがあるということを案内する印象的なポスター（写真3）が掲示されていた。入り口階は、ゲート正面にまず展示スペースとリテラシー教室があり、左側に貸し出しカウンター、右側に浮島状態のレファレンスデスクと広い閲覧席スペースという配置になっていた。リテラシー教室には25台ほどのパソコンが据え付けられており、授業がない時間帯はコンピューターラボとして利用者に解放しているとのことである。講師卓には“資料は5W1Hで評価しよう”という図書館リテラシー等のガイダンスで使われていたというパネル（写真4）が置かれていた。

展示スペースは、区切られた空間ではなく、エントランスの壁沿いに付近のカウンターと同じ木目素材の展示ケースを

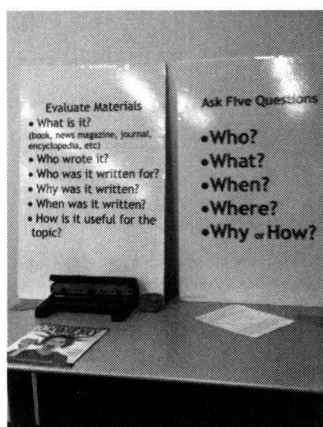


写真4 リテラシー教育用パネル



写真5 展示スペース

配置しており、開放感と重厚感を感じさせるスペースとなっていた（写真5¹⁾）。レファレンスカウンターは背後に仕切りもなくすぐ閲覧席という浮島状態の配置のため、カウンター前からでも後ろからでも気軽に声をかけられるようになっていた。

日本の図書館でも導入が始まりつつあるソーシャルコミュニケーションチャンネルについて、UCIの図書館では従来型の印刷物（ターゲット別のニュースレター発行）の他に、メルマガ、Facebook、Pinterest、Youtube、twitter（Use and follow #ucilib）を活用していた。またHTML知識がなくても利用可能なLibGuidesというウェブガイド作成サポートツールを使用し、複数の図書館員が共同して、各種ガイドやパスファインダー、コースガイド、リソースガイド、サブジェクトガイドを作成、ホームページで公開している。充実したガイドの内容・量に感心していると、その作成・更新についてはさほど手数はかからないと画面操作をしながら示してくれた。

情報リテラシープログラムとしては、下級学年次におけるライティングの授業で、図書館員がインストラクションを行っている。統計的に見る

¹写真5：左の看板Check Out 付近が貸出カウンター、太い柱より右側が展示スペース。手前の空間が入館ゲート前の広いエントランス部分。

と、ライティング授業を履修する約4000人のうち、500人から1000人ほど、この図書館員によるインストラクションを受けていることになる。前述の LibGuides には、自己学習や課題の提出ができる機能もあり、このシステムがインストラクションでも用いられている。また、学内には Campus Writing Coordinator という組織があり、ここの所属となるピアチューターが図書館にも常駐し、学生のライティングやリサーチの手助けをしている。

このピアチューターは学生のアルバイトであるが、チューターとして採用されるためには成績優秀でなければならず、過去に書いた論文の提出、推薦状、面接、エッセイが求められる。本チューターの給与はキャンパスの他のアルバイトと比べてもかなり高額とのことで、チューターのレベルの高さは保障されているのだろうと感じた。

Palmer 氏と別れた後、Ayala Science Library の見学も行った。こちらは科学技術、医学分野の資料を持つ図書館である。この図書館で特に印象に残ったのが、書架に QR コー

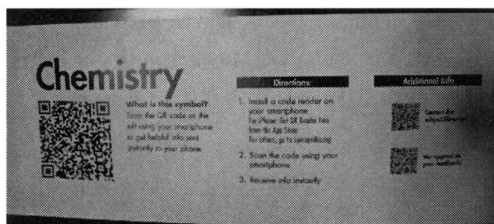


写真6 QRコード付の書架サイン

ドが印刷されたサイン（写真6）である。これは化学の書架に貼られていたもので、利用者が自分のスマートフォンでそれを撮影すると、その場で図書館ホームページの関連ページへリンクし手元でサブジェクトライブラリアンへ連絡ができたり、サブジェクトガイド等を参照することができるものである。サブジェクトガイド、図書館利用ガイドなど、図書館のホームページには利用者のためになる情報を掲載しているが、そのような情報を探そうと図書館ホームページを見る利用者は残念ながら実際にはあまりいないだろう。QRコードのサインを書架に置くという方法であれば、書架をブラウジングしている時に、図書以外の情報の存在に気がついてもらうこともできるのであろうし、これは面白い発想だと思った。

3 カリフォルニア大学ロサンゼルス校訪問

カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (University of California Los Angeles : 以下 UCLA) は 1919 年開校で学生数 40,675 名 (学部生 27,119 名、大学院生 11,721 名)、カレッジが 1 つと 11 のプロフェッショナルスクールがあり、図書館は 10 館ある (2011 年秋現在)。蔵書数は図書 9,748,501 タイトル (紙 + 電子)、継続購入雑誌 101,235 タイトル (紙 + 電子)、世界規模の貴重書、手稿類を所蔵し、UCI と同じく Melvyl database を使用してカリフォルニア大学全ての所蔵にアクセスが可能になっている。図書館員総数は 733 名 (ライブラリアン 73 名、スタッフ 228 名、学生雇用 432 名)、年間総支出額は 41,600,000 ドル規模である。

今回の訪問では、Diane Mizrachi 氏 (Information Literacy Instruction Coordinator, UCLA College Library) と Toshie Marra 氏 (Japanese Studies Librarian) に館内を案内していただき、その後インタビューを行った。

3.1 College Library (学部生図書館)

College Library (学部生図書館) は、1929 年に完成したイタリアンロマネスク様式の建築で Powell Library Building と呼ばれ、歴史を感じさせる美しい建築だった (写真 7)。向かいに建つ同じ様式の Royce Hall と並んで UCLA のランドマーク的な存在となっているとのことであった。

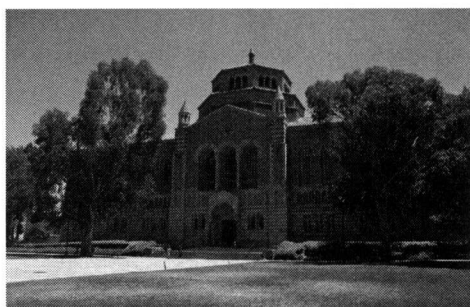


写真7 Powell Library Building

地上 3 階地下 1 階の建物は、中央部分がドーム型でその両側が左右対称の作りとなっている。地下および 1 階は書架と閲覧スペースの占める割合が大きく、3 階は教室が 3 室ある程度で、特徴的なサービススペースは 2 階に集まっている。例えば、ドーム屋根の真下にある円形状の踊り場のよう

なスペース Rotunda (写真8) は、吹き抜けで高いガラス窓から抜群の採光を得られるようになっていて、1階メインエントランスホールと共に、学内関係者のダンスや音楽関係のイベントも開催されることがあるとのことである。



写真8 Rotunda

この Rotunda の左右は、それぞれ貸出カウンターと軽読書コーナー（マンガ本、旅行ガイド、雑誌カレントの書架および大きなソファがゆったりと設置）になっていて、リラックスした雰囲気です滞在できるスペースとなっていた。また Rotunda から階段を挟んだ向こう側は、ルネサンス期のプリンターズマークの装飾が天井に施された大閲覧室があり、Main Reading Room と呼ぶにふさわしいその広さと静寂さも相まって、歴史的建造物ににいるという実感を最も得ることができた。

映画産業の街ハリウッドを擁する地域だけあって、UCLA には School of Theater, Film and Television という学部があり、この教育研究を支えるために College Library 地下に映像資料を所蔵・閲覧に供する Film & Television Archive Research & Study Center が設けられていた。College Library 周辺でハリウッド映画の撮影が行われることもあるそうで、これも特徴的だと思われた。

インタビューで Mizrachi 氏に、情報リテラシー教育に関するアセスメントを何かしているかと尋ねたところ、計画中的のアセスメントについて教えていただくことができた。今後、学生の情報収集行動についてのデータを集め、その結果により、図書館や図書館サービスの教育効果の確認、図書館のサービス、施設、コレクションと学生のニーズのギャップの発見、プログラムの改善点の発見などを目指すということであった。アセスメントの方法としてはアンケートなどの自己分析型が良く用いられるが、このアセスメントは実際の情報収集行動の分析を行うもので、教育効果の検証をアンケートよりも客観的に行うことができるのではないかと感じた。この

アセスメントの成果もぜひ今後うかがってみたいと思う。

3.2 The Charles E. Young Research Library

College Library に引き続いて、Toshie Marra 氏による案内で、The Charles E. Young Research Library を見学した。学部生を主なサービス対象とした College Library に対して、ここは人文社会学系大学院生や教員レベルを対象とした Research Library で 1964 年から 1971 年にかけて建設された。

Research Library 全体の蔵書配置は、1 階および地下にレファレンスブック・地図・マイクロ・カレント雑誌・特殊コレクション、2 階に東アジア資料²と大学史関連、3 階～5 階が一般書・雑誌書架となっている。図書館ウェブサイトによると、1 階と地下は 2009 年から 2011 年にかけて大規模改装を行い、1950 年代のミッドセンチュリーデザインから 21 世紀の近代的な図書館へ進化したとのことである。この改修では、³伝統的な閲覧スペースとデジタルリサーチコモンズの共存を掲げ、利用者の館内滞在時間を増やすことを目指し、リサーチコモンズ、グループスタディールーム、カフェなど、利用者がコラボレーショ



写真9 グループスタディールーム

²Toshie Marra 氏がサブジェクトライブラリアンを務める Richard C. Rudolph East Asian Library が 2 階東アジア資料を収蔵している。UCLA の東アジア研究に資する目的で 1948 年に作られたのが始まりで、中国語・日本語・韓国語の資料を選書・管理し、専門スタッフがレファレンスサービスも行っている。

³Research Library Renovation – UCLA Library <<http://www.library.ucla.edu/libraries/researchlibrary/research-library-renovation>>

ンして研究を進めるのに役立つパブリックスペースが拡張された。

リサーチcommonsは広いスペースに約20のブースがあり、それぞれに4～8人分のカラフルなソファや椅子（オレンジ、グリーン、ターコイズ）、テーブル、スクリーンが用意され、図書館のデジタルリソースを使いながら、共同して研究・調査を進めることができる。また、一部のブースにはラップトップで操作できる大型のLCDモニターもある。グループスタディールームは壁で仕切られた予約制の小さな個室で、壁面の片側が足元から天井までホワイトボードになっていた（写真9）。ただ、誤って反対側の白壁面部分にも書き込みがされてしまっている個室もあった。

また館内のカフェcafe451⁴では飲み物と軽食を購入してその場で飲食するスペースがあり、一通り館内を案内していただいた後、インタビューはここで行った。利用者にとっても、より長い滞在に役立っているとのことだった。

これらの施設を見て、2012年5月にオープンした和泉図書館とよく似ているという印象を持った。和泉図書館も滞在型を目指し、カフェや学生同士のコラボレーションスペースを多くとった設計であり、壁面や仕切り壁にガラスを多用していることや調度品の鮮やかな色彩などもよく似ている。従来の据付型のパソコンやラップトップだけでなく、タッチパネルや動的に表示が変更されるサイネージディスプレイ（写真10）⁵など、新しい情報機器を多数設置していることも似ている点の



写真10 サイネージディスプレイ

⁴店名の“451”は、Ray Bradbury 著“Fahrenheit 451”というサイエンスフィクションノベルが College Library の地下で執筆されたことに由来するとのこと。

⁵リサーチcommons壁面のデジタルサイネージ。静寂レベルについての説明、グループスタディールームの予約方法についての説明、利用者向けのウェルカムメッセージが、統一フォーマットで掲出されていた。

一つと思われる。

ちなみに館内訪問者数はこの改修で約2倍増加したとのことで、建物が学生を図書館に行ってみたいと思わせる大きな要因になるということということに改めて感じた。

展示エリアは、エントランスを入って目の前の1階ロビーギャラリーと、建物奥の East Exhibit Case の2箇所ある。ロビーギャラリーは、入り口から入館する動線の正面に展示ケース6つがあるが、半透明のガラスパーテーションで円形に区切られた明るい雰囲気、気軽に立ち入りやすい印象を受けた。

広大なキャンパス内の移動も含め、訪問の冒頭から最後まで長時間にわたり Mizrachi 氏と Marra 氏にご一緒していただきながら、異なる分野を担当されるお二人が、業務・研修等を通して日ごろから協力しあっている様子が想像された。

UCI の Palmer 氏、UCLA Mizrachi 氏および Marra 氏には、お忙しい中大変親切に対応していただき、感謝の念に堪えない。